



クロージングシンポジウム

ミュージアムを「つづける」ということ

いまだからわかったこと、
いまだからできること

「つづける」ことは、「はじめる」よりも難しい？
ミュージアムを「つづける」とはどういうことか。
日本のミュージアム数は、2008年度までは毎年増加していましたが、その後、減少傾向に転じました。
また1999年以降の市町村合併による館数の減少や廃館もありました。
我々はこれまで、ミュージアム数は増え続けるという
前向きで直線的な発想で眺めていました。
しかし近年、無限の数的成長や技術の進歩が続くというのは
思い込みであったことがわかってきました。
可視的に設定されたミュージアムの前進ではなく、
不可視な姿で実感されるミュージアムの原点や目的を
大切にする経営とは何かを、
現場の学芸員の視点とともに考えます。



日時／ 2025年2月2日(日)13:00～17:00

会場／北海道大学学術交流会館 小講堂
※Zoomによるオンライン配信を併用

パネリスト／神田 いずみ(岩見沢郷土科学館 学芸員)

角川 咲江(東近江市文化スポーツ部博物館構想推進課参事、西堀栄三郎記念探検の殿堂館長)

渋谷 美月(北海道博物館 学芸員、北海道大学大学院環境科学院環境起学専攻 博士後期課程)

山口 一樹(夕張市教育委員会 学芸員・社会教育主事)

コメンテーター／今村 信隆(北海道大学文学研究院 准教授)

コーディネーター／佐々木 亨(北海道大学文学研究院 特任教授)

参加者のべ123名(オンライン配信、事後配信視聴者を含む)



クロージングシンポジウム

「ミュージアムを「つづける」ということ」開催報告

いまだからわかったこと、いまだからできたこと

神田 いずみ(岩見沢郷土科学館 学芸員)

角川 咲江(東近江市文化スポーツ部博物館構想推進課 参事、西堀栄三郎記念探検の殿堂 館長)

渋谷 美月(北海道博物館 学芸員、北海道大学大学院環境科学院環境起学専攻 博士後期課程)

山口 一樹(夕張市教育委員会 学芸員・社会教育主事)

報告者：佐々木亨(北海道大学文学研究院)

神田 いずみ(岩見沢郷土科学館 学芸員)

「合併20年目のまちで博物館施設の課題と今後を考える」

2006年に、北海道の岩見沢市・北村・栗沢町が合併し、現在の岩見沢市が誕生し、旧三市町村の博物館施設と資料が岩見沢市へ引き継がれました。合併後、博物館施設運営における課題として、老朽化による施設の廃止や設備故障とともに、資料の保存環境上の懸念などがあります。併せて、合併後の岩見沢市としての歴史を示しにくくなりました。そのため、市内の各施設との連携は重要で、市史資料室、市立図書館の協力で資料整理や教育普及を実施しています。例えば「いわみざわのお宝おひろめ」では、郷土科学館と図書館で市内遺跡出土遺物および考古関連書籍を展示し、講座を実施しました。来場者が多数訪れ、歴史への関心の高さを感じました。

厳しい時代だからと言ってただ事業を縮小するのではなく、これだけは続けたい、守りたいことを主張できるようになりたいです。その1つは、地域の歴史への関心に細かく対応できるのはその地域の博物館だけ、「博物館に聞けば何かわかるかも」という信頼に応えていくことです。

角川 咲江(東近江市文化スポーツ部博物館構想推進課 参事、西堀栄三郎記念探検の殿堂 館長)

「人生は実験なり(西堀語録)」「つづける」と「変える」こと

2006年に1市6町が合併した、東近江市(滋賀県)が誕生しました。勤務する文化スポーツ部では、4つの博物館、2つのホールなど8施設の管理運営を担っています。これまでミュージアムの現場で館長として勤務していましたが、2023年に博物館構想推進課ができてから、本庁に勤務するようになりました。この背景には、市立博物館群を一つの大きな「総合博物館」として運営する博物館構想があります。しかし、文化スポーツ部所管の博物館は、西堀栄三郎記念探検の殿堂や近江商人博物館、ガリ版伝承館のような個性的な小規模館ばかりです。東近江市全体の歴史・文化・自然を網羅していなく、不足しているテーマや領域があります。

例えば、館長を務める探検の殿堂はこんな風に尖っていません。西堀栄三郎を含めた50人の近代日本の探検家たちの探検精神に学び、次代を担う青少年を育成するという使命を持っています。これまで20年間実施してきた、経験を伝え、次の世代に繋げるプログラミング教育「科学探検隊ココロボ」では、多くの実績と人材育成の成果があります。そのため、多様なテ-

マを扱う総合博物館として博物館構想を進めることはできないかと考えています。その一方で、若い世代が自分たちのやり方で博物館運営ができることも大切にしたいです。

渋谷 美月(北海道博物館 学芸員、北海道大学大学院環境科学院環境起学専攻 博士後期課程)

「コロナ禍のムーブメントから、どう変わり、何をつづけるのか」

「おうちミュージアム」は、ミュージアムならではのコンテンツを、おうちで楽しめるようにオンラインで公開し、全国の多様なミュージアムが同じ看板を掲げて、情報をまとめるプロジェクトです。コロナ禍の2020年3月に北海道博物館(札幌市)発で始めました。コンテンツは、ゼロから作るのではなく、過去のワークショップや展示の素材を活用しています。

事業開始以降、参加した館からの紹介で草の根的に参加館が広がり、同年夏までに250館が参加しました。利用者からは、不登校や病気で自宅療養中の子ども達のためつづけてほしい。参加館からは、広報との相乗効果があり、利用者との共感が広がったとのメッセージをいただきました。

コロナ禍ではこの活動は来館の代替でしたが、今後はそうではない業務に展開させていき、さらに学校や福祉施設、観光での利用事例も増やしていきたいです。そのためには、教育普及活動の内容をもっと集約的にアーカイブすることで活用しやすくしたり、分野・ジャンル・対象年齢・地域などでコンテンツを検索したりできたらよいと考えています。

山口 一樹(夕張市教育委員会 学芸員・社会教育主事)

「歩き・語り・聴くことから得た「つづく」ための考え」

1970年代の炭鉱閉山を受け、1983年に「石炭の歴史村」が開園し、観光産業振興の旗印の下、多くの施設が誕生しました。しかし、2007年に夕張市が財政再建団体になり、現在

実質的に開館しているのは石炭博物館のみです。

まちのコンパクトシティ化を進める中で、2020年に開館した「拠点複合施設りすた」に現在勤務しています。ここで働くようになって、夕張市にはミュージアムには収まらないものが多いことに気がつきました。例えば、旧夕張市美術館所蔵作品群もその1つです。ミュージアムそのものがつづかない夕張ですが、変わりながら何かをつづけようとしてきた人々の歩みがそこにあることを感じます。さらに、お店や家庭で大切に飾られている「石炭細工」はまるで1つのミュージアムのようですが、ここから私たち学芸員は誰かの代わりにミュージアムに携わっていることに気づかされました。そしてそこから、ミュージアムに関わる動機はなんだっていい。それに寛容でいること。様々な方向性の活動を俯瞰し束ね、補完しようとする人がいればなおよい、と考えるようになりました。

ディスカッション

神田 いずみ・角川 咲江・渋谷 美月・山口 一樹

コメンテーター：今村 信隆・コーディネーター：佐々木 亨

ここでは、①合併後どうやって地域の通史を伝えるか、②ある精神を伝えることを使命とする難しさ、③「おうちミュージアム」が始まるまでの過程、④夕張市の考え方をどう捉えるか、という論点で進めました。この議論の中で印象に残った2つを紹介します。1つはミュージアムにはサービスを提供する役割だけでなく、事業に関心のある人や組織と新しい関係性を構築する仕組みを作る役割も大切ではないか。そうするとインフォメーションよりフィロソフィーが大切になります。もう1つは事業を企画する際、ミュージアムのリソース×地域の社会的課題から発想することが必要ではないか。その結果「ミュージアムだから」できるのではなく、「だからミュージアム」が必要という社会的信頼を深化させます。